

「川だけ地図」で戦後史を読むー沖縄県那覇市

1. はじめに

私が勤めている学校では、毎年1月下旬に沖縄に修学旅行に行きます。2015年、私が引率担当をした際にタブレット端末を持たせて街を歩くフィールドワークを企画しました。新旧の地図と、ローカル紙「沖縄タイムス」の古い記事や、生徒が切り抜いた記事を埋め込んで、現場で新聞記事を読む試みは、修学旅行の新しい研修の形として注目され、現在も続いています(写真①)。

んの店がひしめく「水上商店街」は、NHKの「ブラタモリ」那覇編でも取り上げられましたので、ご記憶の方も多いかと思います。当時は、新旧地図の比較と起伏などから川の流れ(今は大部分が暗渠になっている)を確認するしかなかったのですが、その後便利なサービスが出てきましたので、紹介したいと思います。

2. 暗渠もわかる「川だけ地図」

「川だけ地図」(<http://www.gridscales.net/#AllRivers>)は、(財)日本地図センターの竹村和弘氏が2014年から公開している全国の川のデータ集です。国土交通省の「国土数値情報」のデータをもとに、全国の河川の線データがあります。無料の地図閲覧ソフトの「カシミール3D」で、インターネットで公開されている地図を見る追加機能である「タイルマップ・プラグイン」をインストールすると、この「川だけ地図」と、地形の凹凸画像を組み合わせた「川だけ地形地図」が入ります。

図①は、「カシミール3D」で那覇市の中心部の「地理院地図」を開いた上に「川だけ地図」を重ね合わせたものです。このように、水面を見られる川だけでなく、地下の導水路を通る暗渠あんきよになっている川も実線で表示されます。「ガープ川」付近を拡大すると、川の流路の上に細長い長屋状の建物があるのがわかります。これが「水上店舗」です(図②)

沖縄戦の終結後(1945年6月)、那覇市を占領した進駐軍は、那覇軍港から現在の国際通り周辺までを立ち入り禁止区域にしました。市民は強制的に立ち退かされ、収容所に暮らしましたが、生活に必要な日用品や食器が極度に不足したため、1945年11月から、現在の牧志公設市場の南の



写真① 「タブレットで修学旅行研修」を報じる記事(沖縄タイムズ、2015年2月1日)

その際、記者さんの案内で連れて行っていただいたのが、国際通りから牧志公設市場にかけて続く「ガープ川」でした。川の上に建物があ

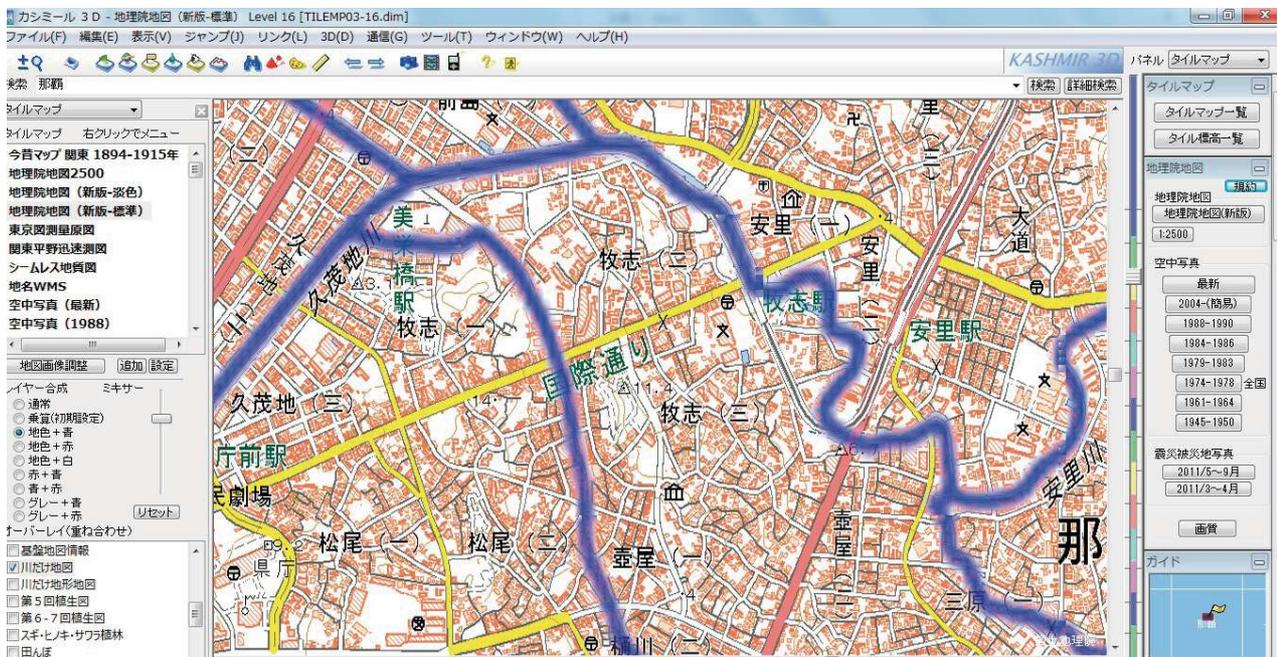


図1 沖縄市中心部の河川(カシミール3Dで表示)



図2 「水上店舗」(カシミール3Dで表示)

「壺屋」地区に、日中に限り陶器を作る職人が入ることが許され、陶器の生産が再開しました。

図3は、大正時代(1919年)の地図です。壺屋、牧志といった街がありますが、この当時はまだ「ガープ川」はなく、人家もほとんどありません。ガープ川は比較的新しく作られた人工水路であることがわかります。ちなみに、「ガープ」とは、沖縄方言で「湿地帯」を意味する「ガープー」から来ているとのこと。

1946年1月3日付で壺屋区役所が設置され、夜間もここに人が住めるようになると、付近にはたくさんの人達が集まり、バラックや闇市が立ち並ぶようになりました。那覇中心部は依然として立ち入り禁止が続いていますので、湿地帯だろうが河川敷だろうが構わず、たくさんの住居や店が立ち並ぶようになりました。ガープ川の川岸はもとより、川を跨いだ上にもバラックが立ち、「水上店舗」が出来たのです(写真2)。



図3 沖牧志・壺屋付近 (1919年)



写真2 1950年頃の水上店舗
(Wikipedia「牧志公設市場」より)

街がにぎわう一方、ガープ川流域は慢性的な水害に悩まされることになりました。特に台風のシーズンになると川はあふれ、低湿地帯は冠水します。水がひいても大量の泥にさらされ、商品は台無しになり、食中毒も頻発したのではないかと思います。市は水上店舗の店主らに再三立ち退きを命じましたが、店主側も激しく抵抗しました。そこで1960年、市が米軍から管理用地を借地する形で「牧志公設市場」が建てられました(写真3)。1972年に現在の建物が建てられています。ちなみに、ガープ川を横切るメインストリートである「国際通り」は1933年に作られ、1950年代に舗装・拡幅工事がなされました。当時の新聞には「牧志のメインストリートの完成」として取り上げられています。



写真3 牧志公設市場 (2015年撮影)

空中写真の上に「川だけ地図」を重ねて比較してみます(写真4・写真5)。ガープ川の左岸は、1974年当時の写真では、川に挟まれた低湿地帯に家が密集して立っていますが、現在は比較的大きなビルが建ち、緑地帯も増えています。区画整理や公園の設置がされ、防災対策がなされているようです。

3. 展望とまとめ

「カシミール3D」には、「マップカッター」という機能があり、これらの地図や空中写真を、位置情報をつけたままタブレットに移す事が出来ます。地図や空中写真、新聞記事など様々な情報を1台の端末に載せて、「見えない川を見る」フィールドワー



写真4 空中写真(1974年)

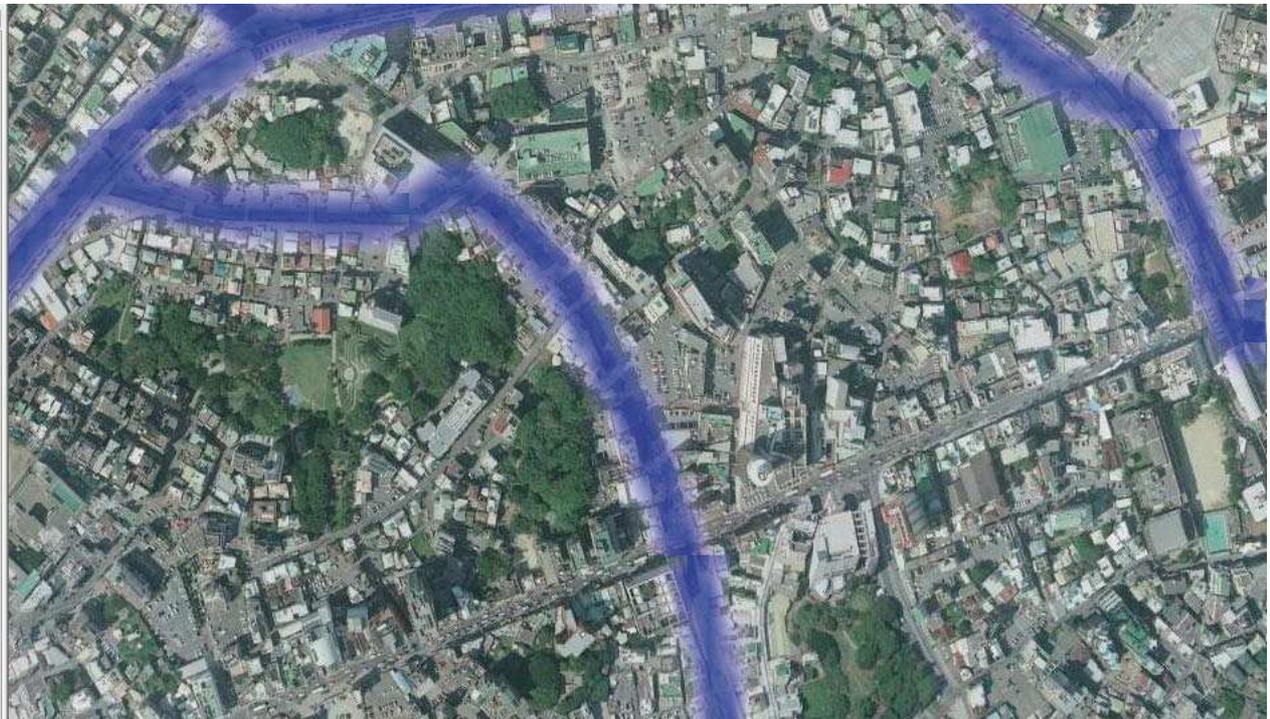


写真5 空中写真(現在)

クをすることができると思います。

河川改修や川の暗渠化が進み、普段そこに川が流れていることを意識しないまま都市生活を送っている人が多いように思います。しかし、水は見えなくすることはできても、川自体をなくすことはできません。集中豪雨などがあつたとき、初めてそこに川の存在を知るようなことが増えているように思います。

街のどこに川があるのか、どういう歴史をたどって今に至るのか、「川だけ地図」を地形図に重ねることで、いろいろと見えてくる景色があります。身近な地域はもちろん、修学旅行などで訪れる都市の事前学習の中に、GISと防災を取り入れる事ができるのではないのでしょうか。